

担当者: 中田秀基 (産総研)

AREA	Application, Programming Models and Environments Area
内容 状況	<p>名前からはなにを焦点にしているのか今ひとつ不明だが大別すると以下の3つに分けられる。</p> <ul style="list-style-type: none">•アプリケーションをデプロイした実際Gridの構築<ul style="list-style-type: none">–Gridの管理、ユースケース、グリッド憲章–Application and Testbeds, Grid User Services, Production Grid Management, Life science Grid,•プログラミングモデル、API<ul style="list-style-type: none">–GridRPC, チェックポイント–Advanced Programming Models, GridRPC, Grid Checkpoint and Recovery•プログラミング環境<ul style="list-style-type: none">–デバッガ、プロファイラ、グリッドシェル–Advanced Collaborative Environments, Grid Computing Environments, User Programming and Development Tools
今後	GGF7でいくつかのワークショップを計画している。
所感	RGばかりで(承認されたWG)がまったくないことからわかるが、GGFの中でもアカデミックよりで産業界からは遠い印象がある。新規に提案されつつあるRGも含めて、テーマの重複が見られるように思える。今後どのように整理されていくのか、注目される。

AREA名 : Application, Programming Models and Environments Area

グループ名		内容
W G	Grid CheckPointing and Recovery(未承認)	チェックポイントやリカバリに関するAPIを定める。2セッション(23人)。第1セッションはプレゼンテーション中心。第2セッションはブレインストーミング。
R G	Advanced Collaborative Environments	・Security Requirements 文書を作っている最中。ゆくゆくは実装に役立つようなものを作る。4分野について要件を集めたので、それを元に文書を作ってGFD にしようとしている。Data Models RG が提案された。(がおそらく否決されるであろう)
	Advanced Programming Models	今回はセッションなし(GridRPC BOFを開催)
	Applications and Test Beds	Usecaseを収集。アプリケーションに依存した要請を整理。ワークショップを予定。APPS Grid Technology Assessment をSCに応募。毎年やる予定。デモをやるつもりらしい。
	Grid Computing Environments	Workflow Specification and Management, Portal technology, GCE shell, Grid Application & testbedsに関するワークショップを計画。GGF7ではポータルに関してミニワークショップを、GGF8ではアプリケーションやワークフローに関するワークショップを検討。
	Grid User Services	参加者が足りず(8人)存続が危ぶまれたが、とりあえず存続が決定。グリッド憲章はGGF7までにドラフトがサブミットされる予定。
	Production Grid Management(未承認)	“How to pull it together” を作成。既存のグリッドのケーススタディを集める。
B O F	GridRPC	WGの候補。GridRPCのAPIを定めることが目的。1年後をめどにドキュメントを作成。
	User Programming and Development Tools	いまどのようなユーザツールを用いてグリッドアプリケーションをプログラミングしているか、それにどのような問題があるか、のアンケートを作成して実施する。
	Life science Grid	BOFのほかに半日ワークショップを開催した。GGF7ではFull dayのワークショップを計画。

担当者： 林 憲一 (サン・マイクロシステムズ)

グループ	Grid Check Pointing and Recovery-WG
目的	Heterogeneousなグリッド環境で、Check Point Recoveryを実現するための要件を定義し、APIを策定する。
状況	既存のCPRの調査から、GridCPRに必要な要件を検討中。
進捗	一回目の会合では、既存のCPRについていくつか紹介された。二回目の会合では、failure scenarioとそれをどこまでカバーすべきか議論された。またDraftドキュメントを書く人がアサインされた。
今後	メーリングリストで引き続き議論。一通だけfailure scenarioについてメールが来た。
参加者数	約20人 (1, 2とも)
所感	GridCPRでどこまでカバーできるか、そのために必要なオーバーヘッド等、考慮すべきことはまだまだ多いと思うが、議事の進行は比較的スムーズだった。

担当者： 首藤 一幸 (産総研)

グループ	ACE-RG: Advanced Collaborative Environments Research Group
目的	中長期: Providing human-centered techniques and technologies for facilitating interactive, collaborative, and immersive access of Grid resources from anywhere and at anytime. 短期: Security Requirements of ACEs を文書としてまとめる。
状況	GGF5までで、4分野(Access Grid environments, Tele-Immersive env., Remote Visualization env., Dynamic and Asynchronous env.)についてのセキュリティ上の要件を表としてまとめた。
進捗	表を元にして、セキュリティ要求文書の作成にとりかかった。 1コマ目は、作った表や文書の雛型(秘書Tom Coffinが用意)について議論。 2コマ目は、雛型の中身を埋めていくという作業。おそらく半分もできなかった。 最後に、Data Modelsという新RGの提案発表があった。グループになるかどうかは怪しい。
今後	•セキュリティ要求文書を完成させ、GFD(Grid Forum document)にする。 •セキュリティ要求を満たすために既存のグリッドセキュリティシステム(Akenti/GSI/CASなど)をどう適用できるか検討する。 •GGF7以降に取り組んでいくトピックを決める。GGF6で議論する予定だったが、できず。
参加者数	1コマ目は26人、2コマ目は激減して13人で始まり、最終的には16人。
所感	文書というoutcomeを出しにくい性質のグループであろう上に、文書を作ることに強い動機を持った人がいないように見える。グループのあり方を問われている時期。

担当者: 西田 晃 (東大)

グループ	Applications and Test Beds Research Group (APPS-RG)
目的	応用分野と Grid 基盤開発者との間の橋渡しをするとともに, 効果的な Grid 技術の利用に関する情報を応用分野の研究者に伝え, より広い範囲での Grid 技術の利用を促進することを目的とする.
状況	Char は Potzdam 大の Ed Seidel 氏と NASA の Tom Hinke 氏. Document はまだできていない. Glasgow で Workshop (NeSC) が開催されており, life science で利用が始まっている. SC2002 にて, most innovative data-intensive application, most geographically distributed application, most heterogeneous set of platforms の3部門を設けてデモを行う予定 (http://scb.ics.muni.cz/static/SC2002/).
進捗	セッション1では SC2002 でのデモ (HPC Challenge) に関する説明があり, 参加条件等について質疑が行われた. 連絡は上記 web ページ上で行われる予定である. これに関連して TeraGrid サイトに関する説明があった. セッション2では今後の方向性について議論が行われ, life science grid, virtual observatory などの応用プロジェクト, 及び性能評価 (Grid Benchmarking WG) 分野との連携を強化することで合意した.
今後	今後の目標として, 1. grid application に関するワークショップの定期開催, grid technology assessment の定期実施 (評価用のアプリケーションセットを作成する) 2. ケーススタディの収集 3. burning issues, application-unique requirements に関する報告, などを確認した.
参加者数	約30-40名.
所感	具体的な応用については標準となる技術が確立されておらず, 性能評価についても解決すべき課題は多い. 本 RG での議論を通じて, 今後の方向性が定まっていくものと思われる. 応用分野からの参加者が多く, 実際の利用に伴う問題点を明らかにする上で有意義な活動であると思われる..

担当者: 鈴木 豊太郎(東工大/学振)

グループ	Grid Computing Environments Research Group
目的	グリッドのユーザ環境 (フレームワーク、ポータル、PSE(Problem Solving Environment)) を調査し、その共通機能と相互運用性についての検証を行う。また、ユーザの要求事項と、ユーザと開発者の間の相互運用性を支援する機能やプロトコル、API を同定する。これらの調査した情報は他のサービスレベルのワーキンググループに反映される。
進捗	<ul style="list-style-type: none"> •チャーターの改訂 <ul style="list-style-type: none"> – 細かな表現の修正 (Best Practice を Current Practice にするなど) •3つの発表 <ul style="list-style-type: none"> – Nirmal Mukhi (IBM) , BPEL (Business Process Execution Language) の概要 <ul style="list-style-type: none"> • 複数のウェブサービスから構成される一つのビジネスプロセスを表現するためのワークフロー言語 – Piyush Mehrotra (NASA) , ワークフローの仕様とワークフロー管理について <ul style="list-style-type: none"> • GGF5 のワークフローに関するいくつかの発表に基づいてドキュメントを作成 – Geoffrey Fox (Indiana) , “GCE Shell” の提案 <ul style="list-style-type: none"> • ポータル用のシェルの必要性を提案 (gce_cat やgce_cpなど)
今後	•GGF7 でワークフローに関するワークショップを開催(1日の予定)。発表、ポスター、トレーニングのセッションを設ける予定
参加者数	約50人
所感	特になし

担当者： 中田秀基 (産総研)

グループ	Grid User Service-WG
目的	グリッド環境におけるユーザやサポートスタッフ間で了解しておくべき事項を定める。 具体的にはグリッド憲章、トラブル発生時の連絡事項など。
状況	前回から人数が少なく存続が危ぶまれていたが当面は続行が決定。担当者が参加していないドキュメントを別の著者に割り当ててドキュメントの成立を図る。
進捗	Grid Constitution(グリッド憲章)には進展。次回までにドラフトを作成。 Support Services & Tool requirements には新たな著者を割り当て。 他の2つのドキュメントは進展せず。
今後	Trouble ticket exchange を誰かに再度割り当てる。Getting Start Guideのようなものを作成する。
参加者数	(1)8人 (2) キャンセル
所感	とくになし

担当者: 林 憲一 (サン・マイクロシステムズ)

グループ	Production Grid Management-RG
目的	グリッドの実際の運用についての、経験やノウハウ等をまとめ、ベストプラクティスや役に立つドキュメントを作ること。
状況	ドキュメントに含めるべき項目を列挙した。
進捗	ドキュメントに含める項目を参加者が列挙し、それぞれについての定義の議論があり、項目はほぼ出揃った。
今後	GGF7, 8, 9で引き続き議論する。
参加者数	約30人 (1, 2とも)
所感	チェアが不慣れで、あまり渉らなかった。

担当者： 中田秀基 (産総研)

グループ	Grid RPC BOF
目的	Grid RPC (Remote Procedure Call) のAPIを策定する。
状況	APIは、GGF5の時点でたたき台が提案されている。WGとしての認定を求めている。
進捗	今回はWG設立に向けて議論の焦点を整理した。 範囲を限定してスケジューリングの側面を省くことを確認。 1年後を目指してドキュメントを整備していく。
今後	WGとして認定されればドキュメントの詳細化を行う。セマンティクスの整理などを行う必要がある。
参加者数	10名程度
所感	とくになし

担当者： 林 憲一 (サン・マイクロシステムズ)

グループ	BOF: User Program Development Tools for the Grid
目的	グリッドで使えるデバッガやパフォーマンスチューニングツールを開発する。
状況	Draft charterが提示された。
進捗	Draft charterについて議論し、ツールに必要な項目を調べるためにサーベイをすることになった。そのサーベイに含める項目を参加者が列挙し、それを元にサーベイを行うことになった。
今後	サーベイの実施。
参加者数	約30人
所感	サーベイをしてみると言っても、対象になる人がどれほどいるか、不明。

担当者: 伊達 進(阪大)

グループ	Life sciences Grid BOF
目的	Life Sciences Grid RGの立ち上げのための準備を整える。
状況	第1回目のBOFで、Life Sciences Grid RGのための準備をおこなっている。 1) 最初に参加者全員の自己紹介 2) Apps Research Group(ARG)とLSGとの差異についての議論 3) 議長、秘書の選出 などをagendaとする
進捗	ARGとLSGの差異を相補完的な関係とする。Abbas Farazdel(IBM)さんがLSG RGの必要性をライフサイエンスのもつ性質から説く。Charterはほぼ提案どおり承認された。 Chair:Dave Angulo(U. Chicago), Abbas Farazdel(IBM)の方向で進む。
今後	ケーススタディの必要性がBOFのなかで問われ、Arun Kish?(BII)らが次のミーティングまでに調査。
参加者数	約30人
所感	SDSCからの出席がAGで予定されていたが、誰も出席していなかった。比較的人数は多かったような感があるが、Webに記載されているInterim Leadersらが数人そろわない中で進行していたのがすこし気になる。

担当者： 伊達 進(阪大)

グループ	Life sciences Grid Workshop
目的	Life Sciences Grid Workshopを通じて、各国(各バイオグリッドプロジェクト)の現状と課題を共有し、今後のLife science Gridの研究につなげる。
状況	Hannu Saarenmaa氏(GBIF)、伊達進(阪大)、小長谷明彦氏(OBI Grid)、Abbas Farazdel氏(North Caroline Biogrid: NC Biogrid)、Piotr Bala氏(Biogrid within EUROGRID)による発表があった。その後で、小長谷氏からLife Science Grid computing in The journal of New Generation Computingに関する紹介があった。
進捗	第1回目のworkshopということで、それぞれのプロジェクトのプレゼンスが示された。各プロジェクトでターゲットとする分野、開発中のアプリケーションの概要が示され、関係者だけでなく皆に興味深いものであったはずである。Life ScienceへのGridの応用への期待は高い。
今後	バイオへのグリッドの応用は、Abbas Farazdel氏がBOFでBig umbrellaと例えられていたように非常に幅広い技術の融合を必要とする。まさにGridが必要とされる分野であり、目が離せない1つのトピックになりうる。
参加者数	約30-40人
所感	朝早いセッションにもかかわらず、多くの人が集まっていた。90分という短い中で各プロジェクト内の活動がコンパクトにまとめられており、第1回目のWorkshopとしてはよかったのかなと思う。今後の活動が期待できるとおもう。